発見！三河のチカラ

⑧ 岡崎・松應寺横丁にぎわい市

活気戻る露店の風情

昔ながらの木造民家が軒を連ねる静かな通りに昨年十一月、雑貨や駄菓子の露店が並んだ。「いらっしゃい」。威勢のいい掛け声が飛び、買い物袋を提げたお年寄りや親子連れが足を止める。普段は閑散とした街が久しぶりに活気づいた。

徳川家康の父広忠の墓がある岡崎市松本町の松應寺のかいわいは、昭和中期ごろまで、芸妓が歩き、置き屋や小料理屋が立ち並ぶ三河有数の花街だった。時代の流れに取り残された今は住民の高齢化が進み、空き家が目立つようになった。

「風情を残し、にぎわいを取り戻したい」と、昨年七月に地元町内会と松應寺、市内のNPO法人岡崎まち育てセンター・りたの三者が「松應寺横丁にぎわいプロジェクト」を企画した。露店が並んだ「松應寺横丁にぎわい市」は第一弾。

にぎわい市には住民のほか、地元以外の若者や障害者団体も賛同し二十五店が集まり、縁日のような風情に。松應寺の服部善樹住職（四四）は「参道を歩けないほど人が集まりびっくり。さびれてしまった街ににぎわいが戻り、本当にやってよかった」と話す。

復活した「玉子屋」で客と談笑しながら駄菓子や手作り雑貨を売る杉浦友美さん㊨＝岡崎市松本町で

駄菓子の露店を出した地元の杉浦友美さん（三五）も松應寺かいわいに特別な思いがある一人。祖父母がかつてこの地で営んでいた駄菓子店「玉子屋」を復活したいと思っていた。

玉子屋の創業は戦後間もない一九四七（昭和二十二）年。鶏卵も売っていたからこの屋号になった。杉浦さんが小学生のころ、遠足前日に小銭を握り締めた子どもが押し寄せ、大人も立ち話を楽しんだ。「たくさんの人が玉子屋に集まり、祖父母はとても慕われていた」。玉子屋は友美さんの自慢だった。

店は、病気に倒れた祖父光夫さんの看病のため八四年に閉店。光夫さんが九〇年に亡くなると、祖母みよ子さんの再開への思いは薄れ、ずっと閉めたままになっていた。

友美さんが露店で同じ場所に復活させた玉子屋には、自身が大好きだったくじ付きの菓子や手作りの手芸を並べた。昭和四十年代当時の玉子屋や店番する当時のみよ子さんらの写真も飾り、「昔ここは駄菓子屋でした」と添えた。

一月十二日に八十五歳のみよ子さん。昔のなじみ客に「あんたにもこんな時代があっただねえ」と声を掛けられ、笑みを浮かべる。

そんな光景を見て、友美さんは三月二十五日に開かれる次回のにぎわい市でも駄菓子の露店を出すことを決めた。作業療法士の資格を生かし、お年寄りに健康体操を教えることも考えている。

「顔と顔を合わせた温かい人付き合いがまだある。玉子屋を復活することで『こんな街だった』と多くの人に知ってもらいたい」と友美さん。街の再興を願う思いは祖母から孫へ、しっかりと受け継がれている。

松應寺かいわい　江戸時代は門前町として栄え、芸妓が待機する置き屋が開業したのは1906（明治39）年。昭和初期の最盛期には置き屋が36軒、250人の芸妓がいたとされる。プロジェクトは松應寺かいわいの日常的なにぎわいの創出が目的。にぎわい市の定期開催のほか、空き家を活用した日替わり飲食店や雑貨店などの開設、「かわら版」による情報発信を予定している。